

博士學位論文

内容の要旨および審査結果の要旨

氏名・（本籍地）	相原 嘉之（大阪府）
博士の専攻分野の名称	博士（文学）
学位記番号	乙第13号
学位授与の日付	平成30年3月19日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項
学位論文名	古代飛鳥の都市構造
論文審査委員	主査 奈良大学 教授 坂井 秀 弥 副査 奈良大学 教授 寺崎 保 広 副査 奈良大学 准教授 豊島 直 博

【論文内容の要旨】

序 研究の目的

第1部 7世紀における宮都の成立過程の研究

第1章 倭京の実像－飛鳥地域における京の成立過程－

第2章 近江京城論の再検討－7世紀における近江南部地域の諸相－

第3章 新益京造営試論－藤原宮・京の造営過程－

第2部 古代王宮の位置と構造の研究

第1章 飛鳥の諸宮とその展開－史料からみる王宮造営の画期－

第2章 宮中枢部の成立過程－内裏・大極殿・朝堂院の成立－

第3章 飛鳥浄御原宮の宮城－官衙配置の構造とその展開－

第3部 飛鳥地域における都市構造の研究

第1章 宅地空間の利用形態－掘立柱建物の統計的分析を通して－

第2章 飛鳥地域の道路体系の復元－都市景観復元に向けての一試論－

第3章 飛鳥の古代庭園－苑池空間の構造と性格－

第4章 倭京の守り－飛鳥地域における防衛システム構想－

結 我が国における古代国家の形成過程－古代宮都の変遷からみた律令国家の形成

本論文は冒頭の序に続く本論の三部と最後の結からなる。序において、研究の目的が、大宝元年(701)の律令制度の完成による国家の成立について、飛鳥時代の王宮・王都から解明することを明示する。第1部は飛鳥、近江、藤原京が7世紀の王都となった過程を考古学的手法で論じ、第2部は7世紀の王宮の変遷や構造、官衙の成立について、考古資料と文献史料とをを通じて論じた。第3部は7世紀の王都における重要な施設ともいえる宅地・道路・庭園・防御施設の分析を通して、飛鳥地域の都市構造を復元し、最後に古代国家の形成過程をたどり全体の結びとする。

第1部の第1章では、飛鳥地域において発掘された遺跡の分析から飛鳥の開発の動向と画期を分析し、集落・建物、寺院、古墳、官道、土器などのあり方から、7世紀初頭、7世紀中頃、7世紀後半に画期がみられることを明らかにした。第2章においては、前章と同じ手法により近江南部地域の遺跡を分析し、7世紀後半の近江遷都に伴う集落の撤去がみられるものの、大津宮中枢部以外の宅地化は明確ではなく、方格地割も施行されていないことを明らかにした。つづく第3章では、議論が多い藤原京造営について、考古資料・文献史料の総合的な分析から、天武5年(676)の新城造営による方形街区の形成、天武11年(682)の藤原宮の都城計画とその後中断、持統4年(690)以降の藤原京造営再開へと展開することを整理した。

つづいて、第2部の第1章では、史料にみえる7世紀の王宮の造営期間や体制について検討し、王宮造営の第一の画期が正方位の王宮である小墾田宮の造営とし、次に百済宮の造営、そして朝堂院をそなえた難波長柄豊碕宮の成立とつづき、最後は条坊制を伴う藤原宮の成立とする。第2章では、王宮中枢施設群の構造変化を考古資料から分析し、「大極殿」の成立だけでなく、内裏・大極殿・朝堂院の成立について諸説を整理し、確実な成立は藤原宮であることを確認した。第3章では、王宮に付随した官衙について検討し、飛鳥浄御原宮には後の中務省に属する官衙が配置され、藤原宮でこれが集約される点で重要であるとした。

第3部の第1章では、飛鳥地域と藤原京における建物の規模・構造を比較・分析し、飛鳥の盆地内に王宮・官衙・寺院が存在し、その周辺に宅地が配置されるとした。また「新城」方形街区に伴う宅地は、のちの藤原宮を中心とした序列はみられないとした。第2章では飛鳥地域の道路を検討し、既存施設を迂回する道路に東西の直線道路を付加することに特徴があり、条坊をそなえた藤原京の区画道路との比較において、質的にも景観的にも大きな差があるとした。第3章では、庭園遺構を方形池と曲池に大別し、方形池は服属儀礼に伴う池、貯水池、蓮池に細分し、祭祀色の強いものから導水構造へと変化するとし、曲池は懸樋で水を落とす施設と、曲線を多用した護岸に中島をもつ浅い水深のものに細分し、奈良時代以降の庭園へとつながる原型とした。第4章では、丘陵上で確認された掘立柱塀について、飛鳥を圍繞し防衛する施設と推定するとともに、7世紀の国防システムは、北部九州から瀬戸内の山城・軍団、生駒・葛城山系から飛鳥への烽等の監視網、飛鳥中心部の羅城・寺院・河川という三重構造のもと、飛鳥中心部の王宮・官衙の防衛を意図していたとした。

以上の検討を踏まえて、結びにおいて、古代宮都からみた律令国家の形成過程を総括した。飛鳥時代の王宮・王都の変遷の背景には、国際的な関係や、国内的な政治情勢がときの政権に影響を及ぼし、その一方で制度の充実や確立に伴って官衙域が発展し宮域へと集約される過程があること、これと同様に王都は徐々に拡大し、最終的には藤原京の都城の成立に至ることなどを指摘し、これら王宮・王都の実態を解明することは、律令国家の形成過程を鮮明にすることに直結するものであるとした。

【審査内容の要旨】

本論文の著者相原氏は、奈良県明日香村教育委員会に勤務し、古代律令国家の成立において中心的

な役割をはたした多くの重要な飛鳥時代遺跡の発掘調査を担当してきた。この地域では、奈良文化財研究所や奈良県立橿原考古学研究所が継続して重要な遺跡の発掘調査を実施してきており、その成果もとりにいれながら、古代国家成立に関係する考古学的な研究に精力的かつ真摯に取り組んできた。その成果については、これまでも数多くの論文として発表してきたところである。

本論文はそれらを再構成し、その後得られた多くの調査成果をあらためて取り入れて全面的に改稿し首尾一貫した内容にして、周到に検討され整えられている。

第1部と第2部においては、飛鳥時代の国家形成に直結する宮都と王宮の変遷について、総論的な分析と考察を行っている。この時代の研究は、遺跡の発掘調査による考古学の成果のみならず、当時代の基本的な文献史料である『日本書紀』と『続日本紀』による研究が必要不可欠であるが、これまで双方で積み重ねられてきた膨大な研究史を整理し、その成果と課題を適切に踏まえたうえで、宮都と王宮の展開過程を明確にしていることが特筆できる。その結論はきわめて穏当なものであり、今後の調査研究の基礎となり得るものである。

なかでも注目できる考古学の成果として、藤原京城を含む飛鳥と近江京の地域について、重要な学術調査だけではなく、開発事業に伴う数多くの発掘調査を含めて、これまで積み重ねられてきた膨大な発掘調査成果を悉皆的に丹念に集成して分析したことがあげられる。それぞれの年代は、普遍的に出土する土器に着目し、これまで年代観について議論が多かった「飛鳥編年」について、近年かなり修正され共通理解がほぼ得られている実年代に基づき、飛鳥と近江京の地域における集落・官衙・寺院・道路、土器等の動向を詳細に把握したうえで、王宮と王都の具体的な構造と内容を評価した点は重要である。

こうした分析により、両地域の状況に7世紀初頭、7世紀中頃、7世紀後半に画期を見いだしている。また、複雑な経過をたどった藤原京の造営過程について、考古資料と文献史料の統合的な検討を行い、天武5年(676)の「新城」造営による方形街区の施行、天武11年(682)の藤原宮の造営開始と十条十坊の都城計画への展開、天武天皇の崩御による中断、持統4年(690)からの再開、大宝元年(701)以降の京域の拡大整備などとして整理されたことは大きな成果である。また、歴代の王宮の比定とその構造上の特徴について造営の期間・体制との関係で考察し、宮中枢部の内裏・大極殿・朝堂院の成立過程や、歴史的に重要な位置を占めた飛鳥浄御原宮の官衙構造を具体的に考察した意義は大きい。

第1部、第2部は本論文においての総論的な内容であるが、飛鳥地域における宅地空間、道路体系、苑池空間、防衛システムをとりあげた第3部は、各論としてきわめて重要な指摘が多く含まれている。宅地空間については発掘調査で検出されている掘立柱建物の規模・構造から居住者を4つのランクに分類して、その分布のあり方を浮き彫りにしたことは重要である。また、これまであまり注目されることがなかった飛鳥の盆地を囲む丘陵上の掘立柱塀を防御施設としてとらえ、飛鳥を防衛する羅城として評価したことは、中国や朝鮮半島との国際的な緊張関係が、国家形成においてきわめて大きな要素であったことを示唆する点でも意義が大きい。

こうした成果をさらに具体的に深化、展開させるためには、考古資料として豊富に出土している瓦などの遺物を対象にした研究や、飛鳥と中国・朝鮮半島との比較研究などが大いに望まれるところである。

以上のように、本論文は古代飛鳥における膨大な考古資料を集成・分析して、文献史料を合わせたな総合的な研究成果となっており、今後の古代国家及び都市の研究における果たす役割は大きいといえる。

【最終試験の結果】

相原嘉之の博士学位請求にかかる最終試験については、審査委員会の主査坂井秀弥、副査の寺崎保之・豊島直博の計3名があたった。各審査委員は学位請求論文を熟読・検討した上で、平成30年1月10日、

奈良大学総合研究所において博士論文審査公聴会を実施した。公聴会においては、申請者による論文要旨の発表に続いて、各審査委員と申請者により質疑応答がなされた。さらにそれに続いて口述試問を実施した。その結果、相原嘉之が博士の学位を取得するにたる学識を有することを確認した。

【審査結果】

学位請求論文「古代飛鳥の都市構造」の審査の結果から、相原嘉之に博士（文学）の学位を与えることが適当と判断される。